

令和3年度・令和4年度 長崎県教育委員会公募制研究指定
令和2年度・令和3年度・令和4年度 松浦市教育委員会研究指定

研究紀要

《研究主題》

自律的・協働的に学ぶ力を身につけ、
ふるさとの活性化に貢献する生徒の育成
～主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して～



1 研究の主旨

松浦市は、県本土最北端に位置し、人口約2万人の小さな市である。本校は、その松浦市の中心である志佐地区にあり、志佐小学校区と上志佐小学校区から230名の生徒が通学している市内で最も生徒数の多い中学校である。2020年に策定された「松浦市総合計画」には、『これから数十年、人が減り続ける今までに経験したことがない、大変な時代に突入していく。30年後には今と比べて人が半分になってしまうという予測もされている。何かをしなければ、何かを変えなければ、今の松浦は無くなってしまうのだ。「人口減少社会への対応」「持続可能な産業構造の構築」「住民ニーズの多様化・複雑化」などの課題を解決するために、多様な主体による「協働のまちづくり」が必要』と記されている。現在は、アジの水揚げ日本一を生かした「アジフライの聖地宣言」、日本初の海底遺跡として指定された国史跡「鷹島神崎（たかしまこうざき）遺跡」において、令和4年10月に約740年ぶりに引き上げられた元寇船の「一石型木製いかり」など、まちの魅力をPRし、今ある地理的・社会的環境や資源を活用しながら、未来に続くまちづくりに取り組んでいる。

以上のような地域の実態を踏まえ、子供たちが松浦に住み続けたり、あるいは松浦を離れていても、ふるさと松浦の課題に目を向けたりしながら、ふるさと松浦の活性化に貢献しようとする人材を育成することは、本校教育に課された命題でもある。そして、加速度的に変化する社会であっても、その変化に受け身で対応するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、自分らしさ（可能性）を発揮し、多様な他者と協働しながら、未来のふるさとの創り手となるために必要な力を育むことが求められている。

そこで本校では、令和3年度から学校教育目標を次のように変更した。

学校教育目標

自律的・協働的に学ぶ力を身につけ、ふるさとの活性化に貢献する生徒の育成
～学校での学びが子供たちの未来につながる教育の実践～

学校教育目標を具現化し、学校での学びが子供たちの未来につながる教育を実践するには、学習指導要領で明確にされた育成を目指す資質・能力を踏まえて、日々の授業を創ることが求められている。それを解決する鍵は、教師が一方向的に教える授業ではなく、子供が主役の「主体的・対話的で深い学び」を実現することである。

そこで本校では、「研究主題」を「学校教育目標」と同一化し、次のように設定した。

研究主題

自律的・協働的に学ぶ力を身につけ、ふるさとの活性化に貢献する生徒の育成
～主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して～

研究推進にあたっては、カリキュラムマネジメントの充実に努めるとともに、「長崎県授業改善メソッド」や「長崎県読解力育成プラン」を活用し、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した。その手立てとして、「問いに対して全員で追究する各教科の単元づくり」を中心とした授業改善に、教職員が組織的に取り組んだ。また、あらゆる教科等に共通した学習の基盤となる自律的・協働的に学ぶことができるスキルを身につけさせる研究にも併せて取り組んできた。

2 研究構想

【学校教育目標】

自律的・協働的に学ぶ力を身につけ、ふるさとの活性化に貢献する生徒の育成
～学校での学びが子供たちの未来につながる教育の実践～

【目指す学校像】

- ・地域・保護者に愛される学校
- ・自律した生徒を育てる学校

【目指す教師像】

- ・学び続ける姿を通して
生徒のモデルとなる教師

【重点目標（目指す生徒の姿）】

- 1 目標を持ち、実現のために努力する生徒
- 2 自分の意見（考え）に根拠を持ち、
友だちと意見を共有し学びを深める生徒
- 3 1日1善 みんなのために貢献できる生徒

自律

協働

貢献

【研究主題】

自律的・協働的に学ぶ力を身につけ、ふるさとの活性化に貢献する生徒の育成
～主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して～

〈自律的・協働的に学ぶ力〉

- 「めあて」「まとめ」「振り返り」を大切に「自律的な学び」
- 協働的な学びの場の意図的な設定
- スタートラインをそろえる
RS 支援

「指導と評価」の一体化を
踏まえた教育課程の展開

〈各教科等で育成する資質・能力〉

- 単元を見通した授業構想
※単元構想シートの活用
- 「見方・考え方」を働かせる問い
- 適切な学習評価の実施

〈安心感のある学習環境〉

- Q-U 調査・校内調査を踏まえた学年・学級経営
- 生徒を主体にした志佐中「学びの心得」と「学びのルール」の活用
- あらゆる教科等の学習の基盤となる資質・能力の育成

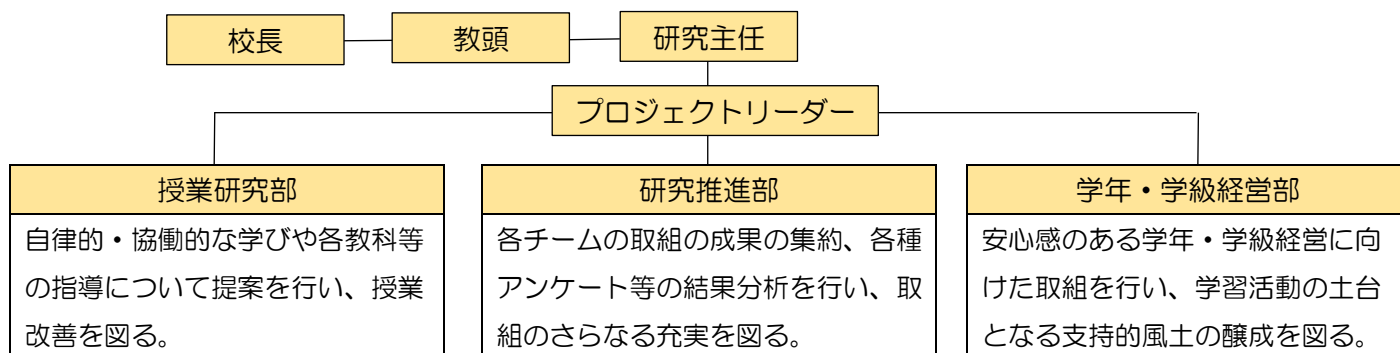
支持的風土の醸成

〈本校生徒の実態〉

- 生徒会活動に主体的に取り組み、行事などを通して生徒自らが自治・自浄を進めようとしている。
- 部活動に活発に取り組む中で、仲間意識の醸成が図られている。
- 各教科等において思考の基礎となる知識・技能が定着していない。
- 全国学力調査の結果から、読む力（読解力）に課題があることが明らかとなっており、授業で取り組む課題の意味を把握させる RS 支援が必要である。
- 学校評価等の結果から、家庭学習の習慣化に課題があることが明らかとなっており、授業と連動した指導が必要である。
- 友人関係による悩みを抱えている生徒が多く、親和的な人間関係（リレーション）の形成が必要である。

3 研究組織

すべての教職員で推進する研究体制の構築



4 授業研究部の取組

(1) 問いに対して全員で追究する各教科の単元づくり

① 学習課題（問い）の設定の工夫

研究推進にあたっては「長崎県授業改善メソッド」（以下「メソッド」と記載）を活用した。その上で、各教科等の指導において、単元のまとまりを見とおしながら、生徒の「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に取り組むことにした。

まず、教師が単元末で目指す生徒の姿（目標）を明確にし、子供の問いや願いなどを引き出ししながら、生徒と教師が全員で追究することができる単元の学習課題を設定するようにした。単元の学習課題を決めることで、単元の終末にどのような方法で子供の学びを見取るのかという評価の方法や必要な手立ても決まってくる。次に、目指す生徒の姿を実現するために、子供たちが見とおしをもって学ぶことができる「単元の学習計画」が必要となる。そこで、②に示した単元構想シートを活用することにした。

なお、問いに対して全員で追究する学びを進めるため、「メソッド」の「すべての子供がめあてを理解しているか確認し、授業のスタートラインをそろえる」ことも大切にした。その際「長崎県読解力育成プラン」を参考に、設定した学習課題が、教師の意図どおり子供たちに伝わるように工夫する「読解力」を意識した支援（以下「RS 支援」と記載）を大事にした。

② 単元構想シートを活用した授業実践

| 単元構想シートの作成例 | | | | 作成上の留意点 | |
|---|--|--|-----------|-----------|-----------|
| 単元構想シート 松浦市立志佐中学校 (教諭) 坂本 旭朗 | | | | | |
| 教科 | 数学 | 第 3 学年 | 単元名 | 平方根 | (全 17 時間) |
| 本単元の評価規準 | | | | | |
| 知識・技能 | 思考・判断・表現 | 主体的に学習に取り組む態度 | | | |
| ①数の平方根の必要性和意味を理解している。 ②数の平方根を含む簡単な式の計算をすることができる。 ③具体的な場面で数の平方根を用いて表したり処理したりすることができる。 | ①既に学習した計算の方法と関連付けて、数の平方根を含む式の計算の方法を考察し表現することができる。 ②数の平方根を具体的な場面で活用することができる。 | ①数の平方根のよさを実感して粘り強く考えている。 ②数の平方根について学んだことを生活や学習に生かそうとしている。 ③数の平方根を活用した問題解決の過程を振り返って評価・改善しようとしている。 | | | |
| 単元末で目指す生徒の姿 | | | | | |
| 数の範囲のひろがりに着目し、その範囲の中でできるようになったことやその範囲でしか解決できない問題を解決することを体験しながら、平方根（無理数）の必要性やよさ、可能性を実感している。 | | | | | |
| 単元の終末で仕組む学習 | | | | | |
| 新校舎の建設に必要な土地の面積から、敷地の幅を平方根を用いて求め、可能な建設計画について判断する。 | | | | | 時数 |
| | | | | | 2 |
| 必要な手立て | | | | | |
| ジグソー法を用いて、ジグソー班では自分の計画が実行可能かを調べさせ、エキスパート班で他の計画の結果と比較させることで、協働的に学ぶ場面を設定する。その際に、正方形とその面積に着目し、1辺の長さを比較するためには平方根の考えを使えばよいことに気づくことができるようにする。 | | | | | 評価 |
| | | | | | 思② 能③ |
| 学習内容 | 学習課題（問い） | 必要な手立て | 時数 | 評価 | |
| 3平方根の利用 | 問題を解決するときに平方根をどのように生かすことができるだろうか。 | 解決に向かう過程で、平方根を利用する場面を設定した問題に取り組み、学習内容を利用することで問題が解決できることを実感できるようにする。 | 2 | 思② 能② | |
| 2根号をふくむ式のいろいろな計算 | 広がった数の世界で、どんな計算でもできるようにするためにはどのように考えたらよいのだろうか。 | 数の範囲を振り返り、四則計算を網羅したことを確認させ、どのような数のどのような計算でも計算が可能であることを実感できるようにする。 | 2 | 知③ 思① | |
| 2根号をふくむ式の加減 | 根号をふくむ式の加法・減法はどのように計算できるだろうか。 | 既習の内容を統合して考え、加法や減法の計算の方法を見いだすことができるようにする。 | 2 | 知② 思① | |
| 1根号をふくむ式の乗除 | 根号をふくむ式の乗法・除法はどのように計算できるだろうか。 | 生徒の予想から、実際に数を単純化したり近似値で具体化したりして表し、乗法や除法の計算のきまりを見いだすことができるようにする。 | 4 | 知② 思① | |
| 1平方根 | 「数の世界を広げる」とはどのようなことだろうか。 | 面積が2の正方形の1辺の長さを調べさせ、長さは存在するが、正確に表現できないことに気づかせることで、生徒が無理数の存在を実感できるようにする。 | 5 | 知① 能① | |
| 単元の学習課題（問い） | | | | | |
| 数の世界をさらに広げることで、数学の可能性はどのように広がるだろうか。 | | | | | |
| 単元の入口（生徒の姿） | | | | | |
| 小学校では、自然数（整数）から始まり、それらの間にある数あるいはそれらを分けた数として小数、分数を学び、中学校1年生では負の数にまで数の範囲を広げた。生徒は、数直線や物差しを目盛り等で数の存在を実感しており、それでは表せない無理数（根号をふくむ数）については未知であるため、導入場面では「これまで表すことができなかった数」の存在に気づかせ、数の範囲のさらなる広がりを実感させるとともに、その必要性やよさ、可能性を実感できるように仕組む必要がある。 | | | | | |

・教科の特性も踏まえて、単元（題材）を設定する。
⇒「身につけさせたい資質・能力」を明確に。

・単元の目標に準じて設定する。
・「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（国立教育政策研究所）巻末資料を参照。

・単元や教科、時間を越えて汎用できる「永続的理解」
単元の学習課題（問い）に正対し、どんな姿で単元を終えてほしいかなど。

・生徒が授業で身に付けた力を発揮する舞台としてパフォーマンス課題などを設定する。

・単元の終末で仕組む学習の解決に向けた学習活動。
・単元終末のヤマ場を意識して計画的に設定する。

・生徒の考えや疑問点から学習課題（問い）を導き出す。
・教科等の見方・考え方を働かせる。

・学習課題（問い）を追究する上で必要な手立て。
・生徒の反応や予想、学びの姿を想定し、必要な発問や助言、提示、対話的・協働的な学びを意識。

・適切な段階で適切な評価を行う。
・つまずきの支援につながる形成的評価を確実に行う。
・能力が高まった状態で総括的評価を行う。

・単元の学習を方向付け、見通しをもたせる。
・概念的・永続的理解につながる問い。
・生徒の気づきや疑問を引き出し、予想をもとに設定。
・単元末に振り返ることができる。

・学習前の生徒の実態や既習の内容を十分理解する。
・ゴールの姿と入口の姿とのギャップに注目する。
・つまずくであろうポイントも想定しておく。

作成にあたっては「メソッド」の1・2を参考に、現在の生徒の姿を踏まえた上で、次の順で単元をデザインする。

- 1 単元（題材）で身につけさせたい力の明確化
- 2 単元の課題解決の場（パフォーマンス課題など）の設定
- 3 課題解決に必要な知識や技能の習得の場の設定
- 4 単元の学習課題（問い）の設定

この考え方には、ゴール（目指す学習の成果）を先に設定する「逆向き設計」により単元を構想することで、その目標達成を目指して、身につけておかなければならない知識や技能、ゴールに迫る思考の流れを授業者が整理しやすいという利点がある。そこで、単元構想シートを活用して、主体的・対話的で深い学びの実現に向けて以下の場面を意図的に仕組み、計画的に指導することにつなげた。

- ㊦ 学習の見通しを立てたり、学習したことを振り返ったりして自身の学びや変容を自覚する場面（主体的な学び）
- ㊧ 自分の考えなどを広げたり深めたりする場面（対話的な学び）
- ㊨ 生徒が考える場面と教師が教える場面（深い学び）

(2) カリキュラムのデザイン

全教科の年間指導計画に単元構想シート・指導案をリンクさせた「志佐中カリキュラム」を作成し、共有フォルダー内で誰でも閲覧できるようにした。その利点として、教師が、

各教科の学びの系統性に気づくとともに、横断的に教科の学習単元のつながりをとらえ、担当教科が学びの系統的かつ横断的なデザインを意図的に行うことを促していく。

さらに、今ある単元構想をパッケージとして各教科担任が毎年更新することで、教材研究の効率化という働き方改革の一環につなげるとともに、総合的な学習の時間における探究的な学びとつなげ、豊かな学びを実現するためのツールとして役立てていきたいと考えている。

| | 4 | 5 | 6 | 7 |
|------|----------------------------------|-----------------------------------|---------------------|---|
| 国語 | 1 深まる学びへ | 2 視野を広げて | 3 言葉とともに | 4 読者の心へ |
| 数学 | 1章 多項式 | 2章 平方根 | 3章 2次方程式 | 4章 関数 $y=ax^2$ |
| 英語 | PROGRAM1 Bentos Are Interesting! | PROGRAM2 Good Night, Sleep Tight. | PROGRAM3 A Hot Spot | PROGRAM4 Sign Languages, Not Just Gestures! |
| 社会 | 1 近代の日本 | 2 現代の日本 | 3 国際社会の発展 | 4 現代社会の課題 |
| 理科 | 単元1 運動とエネルギー | 単元2 生 | 単元3 物質と変化 | 単元4 地球と宇宙 |
| 保健体育 | 体づくり運動 1 健康な生活と医療の予防 | 陸上競技 | | |

| 単元 | 単元名 | 単元目標 | 単元学習課題 | 単元評価 |
|----|-----|--|--|--|
| 2 | 平方根 | 1 数の平方根の必要性を場面を通して理解し、1数の平方根を含む関数や式を計算することができる。 2 数の平方根を含む関数や式を計算することができる。 3 具体的な場面での平方根を用いて実数と無理数を表現することができる。 | 1 数の平方根の必要性を場面を通して理解し、1数の平方根を含む関数や式を計算することができる。 2 数の平方根を含む関数や式を計算することができる。 3 具体的な場面での平方根を用いて実数と無理数を表現することができる。 | 1 数の平方根の必要性を場面を通して理解し、1数の平方根を含む関数や式を計算することができる。 2 数の平方根を含む関数や式を計算することができる。 3 具体的な場面での平方根を用いて実数と無理数を表現することができる。 |

(3) 授業の公開

① 授業の開き合い (ShisaCafe)

授業力を高めるためには、まずは数多くの授業を見たり、他の教師から意見をもらったりしながら、授業改善に向けた課題を見いだしていく必要があると考えた。そこで、経年研修等での研究授業に加え、よりよい授業づくりを目指してさまざまな提案を行ったり、そこから見えてきた課題を職員同士で語り合ったりする機会として、「ShisaCafe」と銘打って授業の開き合い期間を設定した。

shisa Cafe
COLLABORATION | CHALLENGE | CHANGE

9/30 (木) 視聴覚室

OPEN 15:20
CLOSE 16:20

② 授業研究の工夫

すべての職員が、目指すべき授業をイメージしながら、同じ視点で授業を参観するために、「授業参観シート」を作成した。授業を開き合う際は、シートにあるポイント（右図）を参考にして、授業場面に応じて気づきを記録した。このポイントについては、研究の段階や表出した改善すべき課題に応じて設定した。このようにして、職員の授業を観る目を高めつつ、目指す授業と照らし合わせながら、それぞれの授業改善に生かす工夫を行った。

| | ポイント | 評価○ |
|------|--|-----|
| 教師の姿 | 主体性を引き出し、RS支援による学びのスタートを合わせた見通しの持てる「めあて」 | |
| | 教科等の見方・考え方を働かせる期間の工夫 | |
| | 自分の考えを深めたり、広げたりすることができる対話活動 | |
| | 精選的な析書（RS支援が醸成された思考の流れの可視化） | |
| | 次の学びにつなげる「振り返り」 | |
| 生徒の姿 | 「聴くこと」 否定しない うなずく 相手をリスベクトする | |
| | 「考えること」 自分の意見や考えを持って学びに向かう | |
| | 「話すこと」 自分の考えや思いを相手にわかりやすいように伝える | |
| | 「書くこと」 自分の考えを理由つけて書く 空欄を作らないように粘り強く書く | |

⑤ 研究推進部の取組

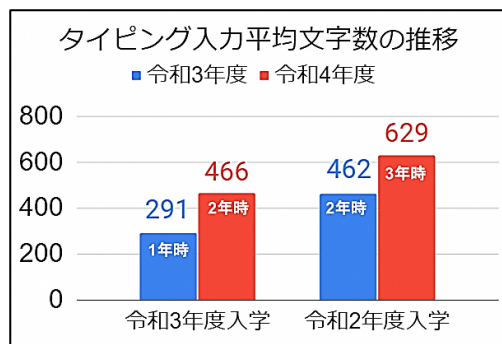
一人一台の端末を効果的に活用し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進した。

(1) 生徒の ICT 活用スキルの育成

木曜日の朝の活動（20 分間）を「タブレット学習」の時間と位置付け、次のことに取り組んだ。

- ・ タイピング練習及び検定
定期的に記録を取り、自己の成長を可視化できるようにした。右グラフがその成果である。
- ・ タブレット技能練習及び検定（右下図）
- ・ タブレットを活用したスキルアップミニトーク

現在では、グループ発表や意見の集約・分類、課題の提出等で、生徒自らが端末を操作し、活用することが可能となっている。



(2) 教師の ICT 活用スキルの向上

生徒の ICT 活用スキル育成と合わせ、教師の ICT 活用スキル向上を図るために計画的・継続的に校内研修を実施した。令和3年度は講師を招聘し、タブレットのアプリケーションの基礎的な知識・操作技能を学び、実際に授業や教材研究で使いながら、全教科の Google クラウドの作成など、できることから推進した。

令和4年度には、校内情報担当職員が各教科や他校の取組をワークアウト形式で紹介し、ICT 活用のイメージを示した。タブレット等の ICT の活用を推進していく上で、授業での使用が目的とならないよう留意するとともに、適切な場面で効果的な活用ができるよう精査した。

生徒のタブレット使用技能の数値化及び使用技能向上を図るための「タブレット技能検定」 ICT 担当

○目的

- ・ タブレットを用いて、指示された操作を行う能力があるかどうかを数値化して測る。
- ・ タブレットを使うことに慣れていくことで、授業中の使用に生かす。
- ・ 数値化によって生徒が苦手な操作を把握し、重点的に教えることで技能向上を図る。
- ・ 数値化によって支援が必要な生徒を把握し、授業やその他の場面での支援の手がかりとする。

○内容

- ・ 技能テストの内容は以下の4つの場面を想定し、Google スライド、Google ドキュメント、Google スプレッドシート、Google Jamboard を組み合わせた課題とする。
- ・ 技能検定本番は1項目実施時間 10 分をタイマーで計る
技能検定練習は周囲と相談してよい。
 - ①タイピング
 - ②活動内容を写真や動画などに記録し、提出する場面
 - ③発表スライドを作成してプレゼンテーションを行う場面
 - ④班活動などで、資料に自分の意見を書き込む場面

⑥ 学年・学級経営部の取組

本校の研究を進める上で土台となるのが、「支持的風土の醸成」である。他者へのリスペクトや双方向的にコミュニケーションをとりながら互いを高め合うことがなければ、自律的・協働的に学ぶための資質・能力の育成は難しくなる。そこで、「メソッド」の3を踏まえ、支持的風土を醸成するために3つの手立てを講じた。

(1) 生徒を主体とした「志佐中 学びの心得・ルール」の実践

自律的・協働的に学ぶ力を生徒に身につけさせるためには、生徒自身が学び方を考え、更新していくことが大事である。そこで、学習部を中心に「志佐中 学びの心得 学びのルール」を考案させ、令和4年1月に完成させた。2月に長崎大学准教授井手弘人先生の遠隔講義を受け、生徒が安心して学ぶための方法として、価値付けを図った。令和4年度から、学習部が月に1度アンケートを取り、その浸透度を図っている。

なお、本校の重点目標と「志佐中 学びの心得」を一体にして、目指す生徒の姿を全職員で共有するとともに、教師と生徒が日々の授業の学習場面に合わせて、「学びのルールのどれを意識するか」を共有するなど、意図的に活用している。

私たちが「安心・安全な授業づくり」と「協働的な学び」を実現するため、学習部長、副部長、学級部長を中心に「志佐中 学びの心得」を作成しました。

志佐中 学びの心得

- 一日一善 みんなのために 貢献できる生徒
- 自分の意見(考え)に 根拠を持ち、友だちと意見を共有し 学びを深める生徒
- 目標を持ち、実現のために 努力する生徒

あわせて、「協働的な学び」を実現するために先生たちが必死だと考える、「志佐中 学びのルール」も作成してもらいました。

志佐中 学びのルール

- 聴くこと 否定しない うなずく 姿勢よく 相手をリスペクトする
- 考えること 自分の意見や考えを持って学びに向かう
- 話すこと 自分の考えや思いを相手にわかりやすく伝える
- 書くこと 自分の考えを理由つけて書く 空欄を作らないよう粘り強く書く

一人一人が志佐中学習生徒の一言であるという自覚をもち安心して授業に取り組みめる環境をつくりましょう。

自分らしく 光れ!!

(2) 総合的な学習の時間における「スキルアップ」の実施

総合的な学習の時間の目標には、各学校が育てたいと願う生徒の姿や育成すべき資質・能力などを各学校の創意工夫に基づき明確に示すことが期待されている。つまり、総合的な学習の時間の目標は、学校教育目標と直接的につながるといって、他教科にはない独自な特質を有している。

本校の学校教育目標の実現に向けては、①「自律的・協働的に学ぶ力」と②「ふるさとでの活性化に貢献する力」という2つの力を育成する。本校は、学びの土台となる、困難をしなやかに乗り越える力やコミュニケーション能力に課題がある生徒が多い。そこで、①については、本校が特に大切にしたい資質・能力として総合的な学習の時間の目標に位置付けた。その際、福岡教育大学教授生田淳一先生の助言を得ながら、総合的な学習の時間(2週間に1回)の中で構成的グループエンカウンターを取り入れた「スキルアップ」を設定し、各学年の課題解決に向けたSSTに取り組んだ。

(3) ユニバーサルデザインの視点による教室環境の整備

① 学習に集中できる環境づくり

- 教室前面のレイアウトの統一(右写真)
- 蛍光色チョークやデジタル教科書体の採用

② 安全・安心な学級づくり

- Q-Uテストを活用した人間関係の構築
- SOSシートの活用(いじめ等アンケート)

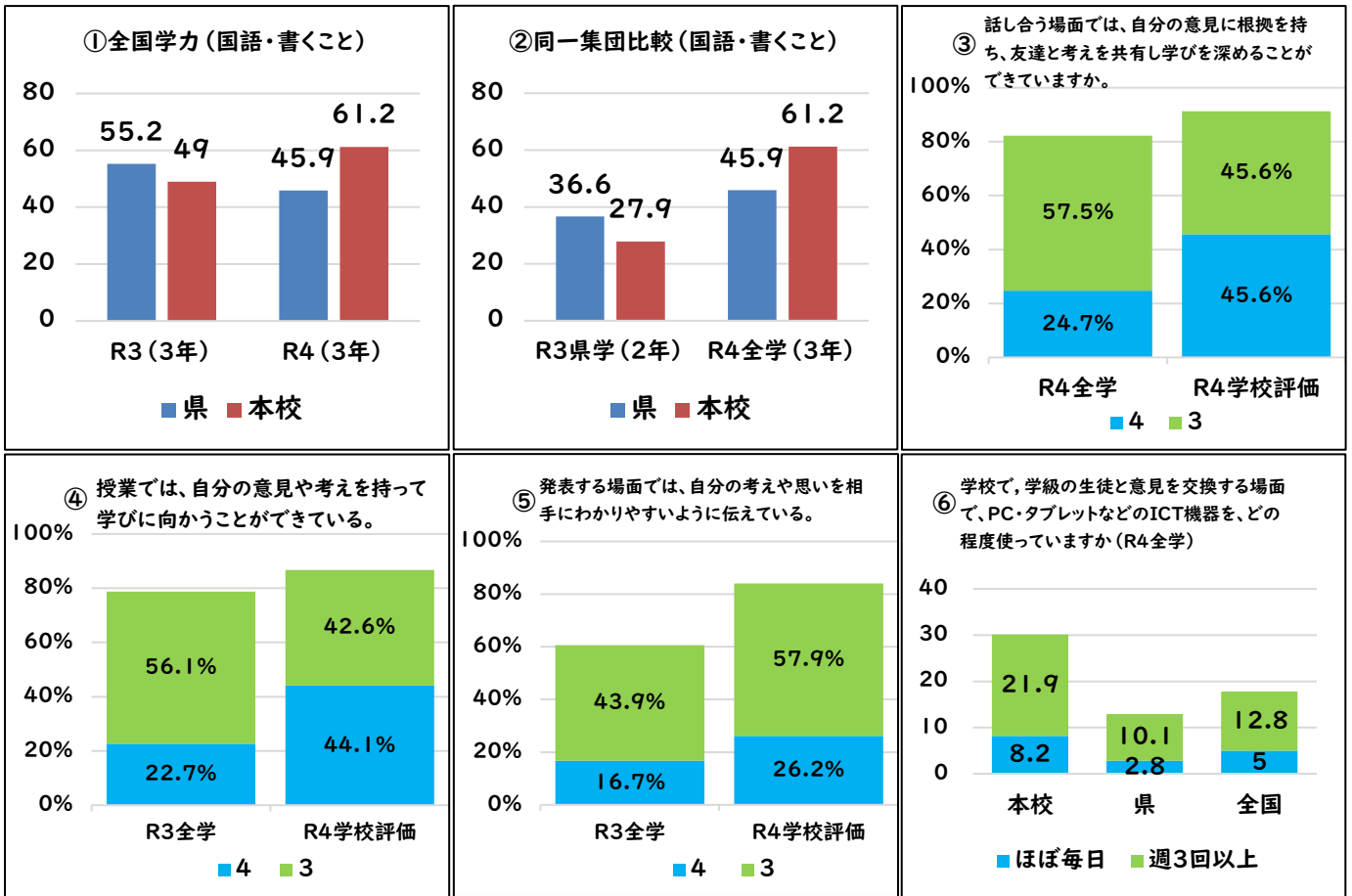
<前面の掲示物については一部(黒板の上)統一しませ、その他は担任の先生で工夫してください。>

- ① 下の図の番号と照らし合わせて掲示計画を行ってください。
- ② 学習目標は貼らない。背面に掲示してください。
- ③ 学習ルールを掲示します。【大きさ】横遊紙半分(白)【作成】学習部(学習ルールを見直し作成)
- ④ 学校教育目標と重点目標を掲示してください。
- ⑤ 担任の先生方で学級に合わせて掲示してください。ただし、プリントの色は基本白とします。文字も黒とし、基本的に黒白基調で統一してください。
- ⑥ 電子黒板がこの付添いにおいてあると想定されるので、基本的に何も掲示しないものとします。掲示する際は、掲示しておいた方がよいが普段はあまり見ないものを掲示してよいものとします。



7 研究の成果と今後の課題

(1) 生徒の変容



- ①は、令和3年度3年生と令和4年度3年生の全国学力学習状況調査 (以下全学) 「書くこと」の平均正答率を比較したグラフで、書く力が伸びていることが分かる。
- ②は、令和3年度2年生県学力調査と令和4年度3年生全学「書くこと」の平均正答率を同一集団で比較したグラフで、同一集団においても書く力が伸びていることが分かる。
- ③④⑤は、令和3年度全学生徒質問紙調査及び令和4年度2学期学校評価 (全校生徒対象) を比較したグラフで、学習課題 (問い) を大切にされた授業づくり、協働的な学びの充実に取り組んだことにより、「根拠を明らかにして書く」「自分の考えを持って学びに向かう」「自分の考えを分かりやすく伝える」などについて生徒の意識が高まったことが分かる。
- ⑥は、令和4年度全学の生徒質問紙調査から、授業中の意見を交換する場面で、全国・県と比較しICT機器の活用が進んでいることが分かる。

(2) 本研究の成果と課題

【成果】

- 全ての教科で単元学習を繰り返し行ったことで生徒の書く力を高めることにつながった。
- 単元の学習課題 (問い) の設定を大切にしながら協働的な学びを充実させたことにより、自分の考えを深めたり広げたりすることを実感させることにつながった。
- 教育課程全般を通して職員と生徒が「自律的」「協働的」に学ぶことを目指して取り組んだことが、生徒の主体性を高め、学校全体の活性化につながった。

【課題】

- △ 一つ一つの授業の学習課題 (めあて) が、「学習内容と学習活動とを密接に関連させているものになっているか」、「学習課題が子供に本当に届いているのか」を常に検証していく必要がある。
- △ はじめから文章を書こうとしない生徒や思考を伴う場面で自分の考えを持つとしない生徒が一定数いる。日々の授業を中心にどこにつまずきがあるのかを見取ることや、家庭と連携して学習習慣を身につけることが必要である。